

浄信寺通信

令和 4 年夏号

名古屋市中村区名駅五丁目二〇番三
宗教法人浄信寺収益事業部羽塚孝和
TEL (〇五二) 五六一一七三六
頒布価格年 千三百円
(檀信徒会費)

映画監督 松林宗恵
まつばやししゅうえ

『私と映画・海軍・仏さま』

まことしやかに さりげなく

十数年前、東京築地本願寺別院で本願寺派の大谷光照門主の妹さんで、東京親鸞会会長近衛正子さん（夫は、近衛文麿元首相の長男文隆氏とハルピンで結婚。敗戦の混乱期に旧ソ連軍の捕虜となり、抑留中に死去）と、副会長の元東宝の映画監督松林宗恵氏に会う機会を得た。激動の時代を生きてこられたお二人に言い知れない感銘を受けた記憶がある。



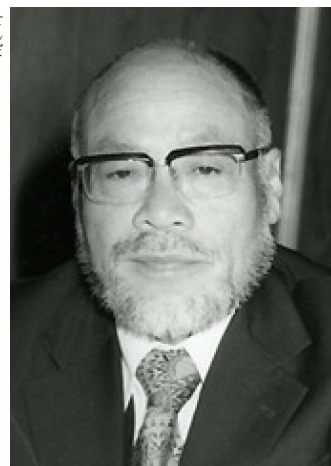
東宝『連合艦隊』 1981(昭和56)年8月8日封切
日本で最初のドルビーステレオ特撮戦争映画。
昭和のスター俳優佐田啓二氏の交通事故死の17
回忌法要で、松林監督が成長した貴一氏に出会
い。商社に就職が内定していた彼を説得・スカウ
トした俳優中井貴一のデビュー作品でもある。

その折、松林監督は、「僕は、親鸞
聖人の教えを常に想いながら映画を
撮ってきた」そんな趣旨の事を言わ
れたと記憶している。

毎年八月十五日は、終戦記念日、
奇しくも松林監督が亡くなられたの
も、二〇〇九(平成二十一)年八月
十五日、八十九年の生涯であった。

中国山脈の山峡を流れる中国地方
最大の河川 江の川この川沿いに広
がる少しばかりの平坦な地、島根県
江津市桜江町(元邑智郡桜江町)の
浄土真宗本願寺派福泉寺の五男とし
て大正九年七月七日に生まれた。そ
の後、住職が他寺の兼務の為、井原
村(現邑南町井原)の満行寺に移り、
小学校時代を井原で過ごし、卒業
後、広島へ出て広島新庄中学校を卒
業して京都の龍谷大学専門部を昭和
十六年に卒業。在学中に吉川英治の
『親鸞』に感銘を受け。寺の五男とい
う立場上、「法衣をまとわない僧侶
でいこうと」決心して上京。東京で
出版社等のアルバイトをしながら、
日本大学の法文学部芸術学科に籍を
置き、やんちゃ坊主だった郷里で見
た巡回の無声映画の強烈な印象から
映画の魅力を断ち難く、当時の映画
界は、学生にとっては花形産業で

羨望の職業であった。ダメ元で受け
た東宝の入社試験の合格通知を受け
取ったのが、昭和十七年十月、二十二
歳の時であった。学生と東宝撮影所
の演出助手今で言うアルバイト助監
督になった。同期の先輩助監督には、
黒澤明・市川崑氏など日本映画界の



松林宗恵 監督

平和公園墓参のご案内

日時：8月12日(金)
13日(土)

午前8時頃～午後1時頃

黄金時代を築いた人がいた。

東宝での最初の助監督の仕事が、高峰秀子主演「愛の世界」(監督青柳信雄) 第一助監督市川崑・第二助監督内川清一郎・第三助監督が新人の松林監督。当時の撮影所では、愛称(ニックネーム)でお互いに呼びあう慣習から、高峰秀子から坊さん大学を出た新人の助監督なら「和尚」ネ!。誰言うことなく「和尚」のニックネームで呼ばれるようになった。

信 通 寺 信 浄

在社一年あまりで、切迫する戦禍で大学が短縮卒業になり、消耗品化した前線指揮官の補充・増強が急務となり、松林監督は、第三期海軍予備学生を志願して合格。昭和十八年十月海軍に身を置くことになった。

翌十九年六月海軍予備少尉に任官。十一月台湾海峡を隔てて台湾を臨む中国南東部の海岸の港湾都市「廈門方面特別根拠地隊附」を命じられ部下一五〇名と共に制空権・制海権を奪われた玄界灘・東シナ海を、粗末な兵装しか持たない輸送船「明島丸」で島影に隠れながら八日ほどかけて廈門島に着任した。

廈門まで、後二時間余りのところ二機のコンソリデーターD-B-24リベ

レータ爆撃機の攻撃を受けるのである。松林少尉は、対空戦闘指揮官として上部甲板で本気で「殺せ!・撃て・殺せ!・撃て」と繰り返し命令したが、輸送船の対空火器では為す術もなく、赤子の手をひねる如く、船上には、爆撃と機銃掃射で戦死・負傷者の死屍累々の惨敗を目の当たりにして、「これで私(松林)の人生も一卷の終わりだろう」と後日述懐されている。事実投下された爆弾で、船は傾き上甲板から中甲板に投げ出され、海に転落一步手前で間一髪のところまで船上にかりうじて踏みとどまる事ができた。

九死に一生を得て景勝地の廈門島の北端、五通方面の行政治安を司る隊長に配属された。二十五歳の時であつた。そのまま終戦を迎えた。廈門に留まること一年、幸いにも人も殺さず、殺されず、部下全員を引き連れて鹿児島港に上陸日本に帰還する事ができた。

□ □ □ □

復員して一ヶ月故郷で休養していたが、市川崑先輩から「早く出てこい映画がつくれるぞ」の手紙にこたえて、焦土化した東京の撮影所に

戻ったが、そこは、出兵前とはガラリと雰囲気異なり、労働組合の赤い旗がたなびき「共産党黨員でなくば、社員に非ずのムードが軍国ファッションと変わらぬ重圧となつて私(松林)には耐えられない苦痛となつた」渡辺邦男監督を中心に十人のスター俳優と共に新しい組合を作り、それが母胎となつた新東宝に籍を置くことになった。

新東宝でチーフ助監督として、斎藤寅次郎・安倍豊両監督の映画に関わった事が、社長シリーズなどの「喜劇映画が多かったのも斎藤監督から知らず知らずのうちに喜劇演出の薫陶を受けていたおかげ」と語っておられた。

五年間のチーフ助監督の時代を経て、最初の監督作品が、昭和二十七年春封切りの丹阿弥谷津子・上原謙主演の「東京のえくぼ」である。東宝入社一〇年(途中海軍の三年間のブラック)で監督昇進は、順風満杯の門出だった。新東宝で十本。大映で二本監督作品の後、昭和三〇年当時東宝重役だった名プロデューサーとして、「青い山脈」「浮雲」「若大将シリーズ」「社長シリーズ」「お姐ちゃんシリーズ」などを発表した藤本真澄氏から「東宝へ戻ってこないか?」と誘われ

新東宝を退社して古巣の東宝に復帰した。以後映画は娯楽であり、「映画の中に仏教を生かし、仏教の中に映画を生かしたい」との想いを込めて六〇本近い映画を撮り続けた。

全七十本の監督映画作品の中で戦争を主題にした映画が五本ある。

その最初の映画が、監督になつて八年目の「人間魚雷回天」(昭和三十年)以来、「潜水艦イー56降伏せず」(昭和三十四年)、「太平洋の嵐」(昭和三十五年)、「太平洋の翼」(昭和三十八年)と続き、最後が「連合艦隊」(昭和五十六年)である。これらの海軍映画に共通するテーマは、松林監督の海軍に対する想い(戦争への全面否定に立脚した賛美・讃嘆)及び無常観・宗教的死生観がバックボーンになっている。戦前・戦中の近代史及び帝国海軍の悲劇を、戦争を知らない世代に映像として残せた事は、監督冥利につきると語っておられた。

五本の海軍映画の集大成・監督としての代表作が、昭和五十六年に封切られた「連合艦隊」である。脚本は、須崎勝彌氏。彼もまた一九四四年九月東北大学法学部在学中に、海軍飛行予備学生として徴兵され、十四期生同期のうち百六十三名が特攻で戦死。戦争が今少し長引いていたら須



中井貴一 特攻機上から大和に別れ

者のために生きる想いを内に秘めた森繁久彌の名優たる演技は、観る者に強烈な印象を与えるのである。

当初から

松林監督によれば、主題歌をアリスを解散し『昂』などを作曲した谷村新司氏を想定して、話を持っていたら『私（谷村）は、戦争映画の歌は書かない』と鰐鰍もなく断られた。東宝の社長室で松林監督が直談判して「戦争を知らない世代に平和のメッセージを伝えたい。そんな役割が果たせる歌手は、あなた（谷村）しかない」と二時間以上説得して生まれた曲が『群青』。松林監督が初めてこの曲を聴いた時は、ピンとこなかった。録音テープを自宅に持ち帰り夜通し繰り返し聴き、明け方近くに、涙が出てきてエンドロールの映像イメージが浮かんできた。

財津一郎演ずる父親が乗艦している戦艦大和が炎上し沈没していく。上空に三機の特攻機が旋回。その指

揮官機上に中井貴一演ずる息子が、大和に敬礼をして、谷村新司の唱う「群青」の間奏の間に中井貴一（遺書）のナレーション。

お父さん、親よりもほんの少しだけ長く生きていることが、せめてもの親孝行です。さようなら、妹たちよ、姉さん、さようなら・・・

大和は沈没。三機の特攻機は、曇天の空の彼方に消えていく。

歌の二番が流れ始めると、画面は、戦後数年経った本郷家、海岸の砂浜に、書かれた死んだ二人の息子の名前が波にさらわれて消えていく。森繁久彌が、海岸に立ち遠くを眺めて、息子の忘れ形見の男の子が、無邪気に浜辺を遊びまわる。遠くから着物姿の母親古手川祐子のアップ。群青色に輝く海が映し出され、出演者のテロップが流れこの映画は幕を、下ろすのである。



松林監督が、海は七変化する、

戦闘になれば、水柱・砲弾・黒煙で海の色は群青色になる。戦争体験のない彼（谷村）がこれを題に歌にするとはその非凡さに感心されていた。

松林監督は、森繁久彌のまことしやかでさりげなさの演技に舌を巻き30本以上の映画を世に送り出した。「まことしやかにやってくれ」「さりげなくやってくれ」が監督の口癖になった。個人的にも「和尚（繁さん）」と呼び合う仲でもあった。監督の自伝に寄せた序文に、「松林宗恵氏は、私（森繁）の無二の親友であり・・・長い年月、この飄逸で暖かい心の持ち主に教わるのが楽しみだった。それでいて結構生ぐさい人間味のある方で・・・黄泉の国に急ぐ友々を松林さんと御一緒に送ったことが多いが、氏は必ず袈裟に着



古手川祐子が海岸で爺（森繁）と戯れている遺児を見つめる

替え一卷の読経をさぐられる。私は何時もその後ろ姿を見ながら生死の理をヒシヒシと感じるのである」と述べられている。監督はこの森繁さんの言葉が何よりの宝であるとも言われた。森繁さんも、監督の亡くなった同じ年の十月に亡くなった。

※参考資料・文献

◇松林宗恵「私と映画・海軍・仏さま」（大蔵出版）

◇大住広人「まことしやかにさりげなく」（仏教伝道協会）

◇春日太一「日本の戦争映画」（文春新書）

◇東宝DVD名作セレクト「連合艦隊」オーディオコメンタリー

※使用画像はDVDからキャプチャー

修 勤 講 恩 報

令和4年11月9日（水）

午前10：00～

勤行・お説教・おとき